

嵯峨野高校アカデミック・ラボ『日本文学から見る近・現代』に対する 大学院生・大学生・研究生の支援・指導に関する実践的研究

細矢 衡^{*}・小野田 磨柚^{*}・齊藤 匡紀^{*}・山根 有貴^{*}・古志 優佳^{***}・植山 俊宏^{****}

(^{*}京都教育大学大学院教育学研究科大学院生・^{**}京都教育大学研究生・^{***}京都教育大学)

Practical study on support, instruction of a graduate student, a university student, the research worker for the Sagano Senior High School academic laboratory "Present age judging from Japanese literature"

KO Hosoya・MAYU Onoda・MASAKI Saito・YUKI Yamane・YUKA Koshi・TOSHIHIRO Ueyama

2017年11月30日受理

抄録：文学の探求講座に関する高大連携事業の報告である。嵯峨野高校のアカデミック・ラボ「日本文学から見た近・現代」の支援・指導を、大学院生・研究生・学部生・大学教員の8名が担当した。従来の国語教育の弊害を破る意味、グローバル的に通用する方法を具現化する意味において成功を収めたと考えられる。

キーワード：高大連携・文学探究・問題解決の読み・文学の予見性・比較読み・分析読み・グローバル化に対応する文学の読み・多読

I. 京都府立嵯峨野高校スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業への支援 —京都教育大学・嵯峨野高校高大連携事業の推進—

京都府立嵯峨野高校は、平成26年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの研究指定を受けて以来、本年度で4年目を迎えている。年度によって数は異なるが、2年生6クラスが十数のコース・講座（アカデミック・ラボと称する）に属し、各自の研究テーマに取り組んでいる。この中に近現代文学のアカデミック・ラボがあり、京都教育大学国語教育専修の大学院生を中心としたサポートチームが支援・指導に携わった。

1. スーパーグローバルハイスクールにおける近現代文学探求の意味

(1) グローバル化のためのコンテンツの確保・拡充

日本の近現代文学とグローバルは一見対極にあるようにとらえられる。これまで海外で評価されてきた日本の作家として川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、村上春樹、小川洋子などが挙げられる。だが、これらはいずれも日本語作品が外国語訳された結果、評価に結びついたものである。この視点では、高校生に日本語作品を外国語訳させるという前提が必要となり、膨大な労力を要する上に、実質的な成果が残りにくいという問題が生じる。そこで、発想を転換し、日本の文学を一般化してとらえ、それをコンテンツとして、英語によるプレゼンテーションを行い、外国人とのコミュニケーションを図るという方法を採用することにした。

(2) 研究テーマの焦点化・明確化

日本の文学を外国人に伝えるとなると、まず考えられるのが、作品の紹介である。しかし、日本文学に対する一定の関心がない場合、コミュニケーションには接点がなく、成果も期待できない。そこで、日本の近現代文学から日本の問題を見るという広い視点を設定することにした。アカデミック・ラボの名称を「日本文学から見る近・現代」とし、文学が日本の近現代のどのような問題を取り上げて、文学的な解決を行ってきたかをとらえる方向で研究を進めた。これを日本の文学を一般化してとらえる視点とした。

2. 京都教育大学の支援・指導チームとその活動

(1) 支援・指導チームの編成及び指導の概要（平成27年度～29年度）

京都教育大学の支援・指導チームが企画に加わったのは、スーパーグローバルハイスクール第2年度からである。受け入れは石田浩一嵯峨野高校国語科教諭であり、京都教育大学の大学院生等の指導には植山が当たった。

①第1年度(平成27年度) 本ラボ選択高校生=15名 指導回数 年7回（発表の参観も含む）

○支援・指導チーム=5名 中島大輔・溝口智大・山内貴弘・口石梨絵（大学院生）・田中真紀（研究生・向日市立勝山中学校教諭）※当時

○対象作品43編 最終検討作品6編『世界から猫が消えたなら』（川村元気）『君の膵臓が食べたい』（住野よる）『容疑者Xの献身』（東野圭吾）『青の炎』（貴志祐介）『午前0時の忘れもの』（赤川次郎）『ツナグ』（辻村深月）

②第2年度(平成28年度) 本ラボ選択高校生=10名 指導回数=年6回（発表の参観も含む）

○支援・指導チーム=8名 松本圭祐・田尻愛里紗（大学院生）・小野田磨柚・田島美咲・細矢衡・福田ひかる（学部4回生）・磯貝美智子（研究生・京田辺立田辺中学校教諭）・大村彩（研究生・高岡市立五位中学校教諭）※当時

○対象作品33編 最終検討作品16編『風に舞い上がるビニールシート』（森絵都）『神去なあな日常』（三浦しをん）『オール』（山田悠介）『ドS刑事』（七尾与史）『キッドナップツアー』（角田光代）『卒業ホームラン』（重松清）『大根の月』（向田邦子）『はずれくじ』（重松清）『八日目の蟬』（角田光代）『カラフル』（森絵都）『昨夜のカレー、明日のパン』（木皿泉）『僕の太陽』（小川糸）『人間失格』（太宰治）『ピンクとグレー』（加藤シゲアキ）『しゃぼん玉』（乃南アサ）『ころも』（夏目漱石）

③第3年度（平成29年度=本年度） 本ラボ選択高校生=9名 指導回数=年7回（参観、予定を含む）

○支援・指導チーム=8名 細矢衡・小野田磨柚・齊藤匡紀・山根有貴（大学院生）・木村美貴・小柳早希（学部4回生）・古志優佳（研究生・亀岡市立亀岡中学校教諭）

○対象作品27編 最終検討作品（現在進行中により未確定。以下、院生等の報告に作品名を提示）

Ⅲ. 本高大連携事業（嵯峨野高校アカデミック・ラボの支援・指導）の意義

1. 旧来の国語教育の弊害打破と新しい国語教育の動向への対応

本連携事業は、一教材単位で精読の授業を行う旧来の国語教育の弊害を打破することを試みること、また新しい国語教育の動向を先取りした実践方法を構築することが主な目的である。

(1) 旧来の国語教育の弊害を打破する試み

これまでの文学教育の中心は、いわゆる精読にあり、心情の読みを中心とした読みの深さを大きな目的としていた。だが、PISA調査を見ても分かるように、世界の大きな流れは、文学においてどのような問題解決が行われたか、それを読者はどう評価し、読者なりに対案が出せるかという主体的で、積極的な「読み」である。このアカデミック・ラボでは、「日本文学から見る近・現代」という大きな研究課題を設定し、複数の作品を比較読みして、読者として一定の見解・意見をまとめ上げ、発表するという一連の学習過程を設定している。

(2) 新しい国語教育の動向への対応

文学の学習をグローバル化するためには、その文学が誕生した社会の背景に踏み込んで、そこから文学をとらえ直すことが求められる。つまり、文学を作品内の世界と見なすのではなく、そこに社会・同時代の人間の問題が反映されているととらえるのである。この視点を用いることで、文学の読みを通じた問題把握力・問題解決力が主体的に養われることが期待できる。そのためには、多数の作品の読み比べと分析・考察が必要となる。

(3) グローバルという視点

文学作品は、基本的にその国、地域で用いられる母語で表現されることがほとんどであろう。そうすると、グローバル化に対しては大きな壁があるということになる。しかし、特定の国や地域における文学が他の国、地域で意味を持たないかというそうではない。背景とする社会や人間を表現した文学には一定の普遍的な原理が反映されていると推測することが可能である。特に社会や人間のもつ問題を強く反映した作品には共通点が見られると考えられる。ここに文学をグローバル的にとらえる意味が生じてくる。だが、作品単体は対象にはならない。

2. 協働的な問題解決

本年3月告示の小学校・中学校学習指導要領に先立ち、昨年12月に論点整理が提示され、学習指導要領改訂の方針が示された。論点整理に至るまでの中央教育審議会答申などをふまえると、高等学校における教育改革の方向性も示されたといってよい。その中の一つにアクティブラーニングがある。ただこのアクティブラーニングは、方法的な改革を求めたものであって、学習の成果としては「協働的な問題解決」の方を重視する必要がある。

(1) 協働的な問題解決に必要な「問題」の設定

前述したように文学はその時代の社会・人間の問題を反映していると考えられる。そうすると、この問題解決的な読みを遂行することで読者は問題解決の”当事者”の位置に立ち、その役割を果たすことが求められることになる。殊に取り上げた文学作品が現代文学である場合は、この図式は直結的に適応されることになる。

(2) 文学を「協働」で読む

「協働的」な読みはこれまでに十分行われてこなかった。もちろん、小学校や中学校におけるグループによる問題解決の読みは盛んに行われてきた。だが、それは、作品を大きく超えるものでも、また作品と社会・人間とを強く結びつけるものでもなかった。このアカデミック・ラボで取り組んでいる「問題」は、読者の社会や人間と結びつけようとするものであり、当事者的に解決を図るものでもある。そうすると、社会や人間をとらえる目として複数の読者の協力が意味を持つことになる。ここに「協働的」な読みが必要となってくる理由がある。

(3) 「協働的」な読みの集団・体制づくり

このアカデミック・ラボでは、いきなり集団の読みは行わない。個人が自分で設けた問題に関わる一定数の作品を分析し、あるレベルの成果を挙げることを前提として、その次の高次の問題設定、問題解決に進むという手順を採っている。つまり、個人の問題解決が行われ、それを交流・共有することで練り上げ、一つの問題に絞り、協働的に問題を解決し、成果（答え）を得て、発表を行うという方式を採っているのである。

IV. 実践の概要と分析

1. 問題解決のための文学の読みについての基調提案

アカデミック・ラボの最初の冒頭に植山が、「近現代小説で扱われてきた問題の本質を見る」という題で、夏目漱石が彼の小説において日本の近代とその問題を結びつけようとしたこと、彼が本格的な生業とした最初の作家であったこと、彼が彼以後の文学と近代を関係づけるためにプロデューサーの役割を果たしたことを講義した。

(1) 夏目漱石の功績—基調提案としての近代文学誕生期の文学と社会・人間との関係の考察—

パワーポイントで6枚のスライドを示しながら、講じた。講義の内容は、以下のスライドの通りである。

No 1 近現代小説で扱われてきた問題の本質を見る

に「小説は先行する作品を乗り越える」点を強調し、問題の把握とその解決に進化があることを説明した。

No 2 漱石(子規)生誕150年(2017年)

漱石以前の著名な作品について概要を説明し、20世紀に入って漱石が職業作家となり、小説家が文化的な「職業」として認知されたことについて解説を行った。

No 3 漱石が本格的に扱い始めた近代社会・個人の問題

漱石以前の作品の大半が旧態依然としていて近代となった日本に生じる問題を扱い切れていないことを強調し、漱石以降文学において近代の問題が本格的に扱われるようになったことを論じた。

№.4 近代の問題の顕在化・明確化

国家による国民の義務の発生が個人の生活・存在を規定すること、そこには戦争が大きな役割を果たしていること、徴兵の意味、教育の意味、富の意味などについて講じた。

№.5 近代社会・近代人の問題

明治維新後、文学が扱うべきテーマを模索していたこと、その解決が未成熟なことについて述べた。

№.6 漱石が作った・育てた近代小説作家

漱石が小説で扱うべき問題を資質・才能に応じて、後進の作家たちに割り振っていたこと、それが大変巧みであったこと、選ばれた作家たちによる作品はバリエーションに富んでいて、今でも読み続けられていること、その枠組みが現代においてもまだ機能していることなどについて講義した。

(2) このアカデミック・ラボで挙げるべき成果の像

近代文学が漱石によって確立され、さまざまな問題が照射されたこと、次の時代を予見する機能を持っていたことを述べ、このアカデミック・ラボに参加する生徒が現代の問題を明らかにする必要があることを伝えた。

2. 比較読み・分析読みのワークショップ

三年生とも、比較読み・分析読みのワークショップを実施し、大学院生たちを交えた小集団の読みによる問題解決を試行した。

(1) 本年度に先行する2年間の比較読み・分析読みのワークショップ

◆平成27年度

『走れメロス』と『友情（下篇）』の比較か、『走れメロス』と『忠直卿行状記』の比較

○「友情のあり方」の視点から『友情（下篇）』と『走れメロス』を比較する

○「君主と臣下・民衆との関係」の視点から『忠直卿行状記』と『走れメロス』を比較する

「友情」にも諸相があること、時代による相違があることに気づかせることを目的とした。分量的に困難があり、『忠直卿行状記』を外し、『友情（下篇のみ）』と『走れメロス』の比較読み・分析読みに変更した。

◆平成28年度

現代の問題として「友情」を読み比べる

・『ベル・エポック』 糸山秋子 2005・『花のような人』 山本文緒 1995・『ナイン』 井上ひさし 1987

○小説を問題解決として読む

○『ベル・エポック』の友情のあり方

・本当に「裏切り」か ・みちかの今後の人生はどうなるか

◇『花のような人』の友情のあり方 ◇『ナイン』の友情のあり方

テーマは前年度を踏襲し、「友情」とした。ところが、『ナイン』は、詐欺師の話なので、それを友情に解釈し直して取り上げることは困難であったので、『ベル・エポック』と『花のような人』の2作品を対象を絞った。

(2) 本年度（平成29年度）の比較読み・分析読みのワークショップ

◆平成29年度

近現代文学に表された「熊」と「人間」との関係の考察—教科書教材から—

○近代文学 『なめとこ山の熊』（宮沢賢治 1934 高校国語総合）

○現代文学 『神様』（川上弘美 1998 高校国語総合）

○参考作品 ・『はなのみち』（小学1年）・『うみへのながいみち』（小学1年）・『くましんし』（旧小学4年）

生徒は、近現代文学の比較読み・分析読みにより問題解決が図られる見通しをもったことが見受けられた。ワークショップを体験することにより方法論的な手応えを感じた反応も見て取れた。

(3) アカデミック・ラボ「日本文学から見る近・現代」の流れ

①参観 昨年度の受講生（現3年生の本発表（ALL ENGLISH））【6月2日（金）】

○SGHの目指すゴールの確認 ○あくまで英語化の支援は担当外であることの確認

②文学研究・読み比べの講義（植山教授）【6月16日（金）】

○夏目漱石を中心とした近代文学史により研究の意義、方法、視点を確認

○ワークショップ『なめとこ山の熊』と『神様』の比較読み・分析読み

③各自テーマ設定・選書（9月の個人発表・グループ発表まで）

④個人発表【9月8日（金）、9月15日（金）】

⑤グループ研究討議【10月20日（金）】

⑥グループ発表【11月24日（金）】

⑦全体会における発表のリハーサル【1月26日（金）】

3. 大学からの参加者の報告・所感・考察

このアカデミック・ラボの支援・指導には、計8名が参加したが、大学授業の都合により部分参加となった者もあり、全参加は、細矢衡・古志優佳と学部4回生の木村美貴・小柳早希と植山俊宏の5名であった。それぞれがまとめた支援・指導の概略と作品の解説を示す。内容、文体は各人の選択に任せた。最初に、古志優佳が全容について述べ、その後細矢衡、齊藤匡紀、山根有貴、小野田磨柚が担当部分について記し、最後に学部4回生小柳早希と木村美貴が担当した作品の解説（植山加筆修正）を行っている。

（1）古志優佳（全参加）

①はじめに

アカデミック・ラボでは、大きく3つの段階を踏んで研究を進めている。1. 個人で関心のあるテーマを設定し、3冊選書して分析・発表する段階、2. グループを組み、新たなテーマを設定して分析を進める段階、3. 分析した結果をグループで発表し、これまででわかった内容と、まだ分析が必要な内容を明確にする段階である。それぞれの段階での生徒の状態や、生徒たちに見られた変化、担当として補助した内容などを記していく。

②個人で関心のあるテーマを設定し、3冊選書して分析・発表する段階

それぞれがABC3冊の本を選書し、AとB、AとCで関連している事項を分析していた。優れた発表では、それぞれのテーマに沿った本文の記述を根拠に作品間の関連性を見いだしていた。しかし、読み込みが浅いもの（『三四郎』偽善）、選書段階で作品として難のあったもの（『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話』）もあった。個人の分析量には差が見られ、3冊を2つのテーマで分析することに、難しさを感じている様子も見受けられた。しかし、この時の「複数の視点で見る」という活動が、段階2、段階3での広い視点での分析に繋がっていたように感じる。

支援・指導として、テーマ設定の面白さ（恋愛アプローチの仕方に対して、学生らしさ）、生徒が選んだ本の新しい価値付け（『レインツリーの国』障害者の普通の恋愛を描いた作品として）、見逃している箇所の指摘（『空飛ぶ広報室』挫折：脇役にも挫折体験有り）、他作品との関連性（『図書館戦争』）などのアドバイスが行われた。

③グループを組み、新たなテーマを設定して分析を進める段階

第一班の「擬似家族」グループは、第一次（個人）発表の段階で、「父子の絆」や「父と子の関係」など、似たテーマで選書（『ステップ』『ステップファザー・ステップ』『ウィンター・ホリディ』）を行ったメンバーが集まっていた。全作品で父子の絆が描かれているが、登場人物たちの設定を捉え直し、「擬似家族」という新しいテーマを獲得したようである。まとめ方に迷いがあったため、「擬似家族」というテーマの先見性をゴールにしてはどうかとアドバイスした。その際、明確に擬似家族だと言える他作品として『キッチン』を挙げた。

第二班の「京都における若者の恋」グループは、『鴨川ホルモー』、『ぼくは明日、昨日の君とデートする』を

軸に分析を行おうとしていた。このグループは、テーマに合った本自体をまだ見つけられていなかったため、『左京区七タ通り東入ル』という本を紹介した。また、植山教授の『京都という舞台設定の持つ意味』『なぜ京都で恋愛なのか』というアドバイスに大いに刺激を受けたようである。

第三班「有川浩作品」グループの班員編成はテーマと作者という視点で行われていた。この班については、大学生や植山教授より、「なぜ有川作品は受け入れられるのか」「これほどまでに売れる要素は何か」という視点をアドバイスされ、有川作品の特徴である自衛隊作品、恋愛の描写、面白い人物設定にまで話が及んでいた、どの作品を追加で読み、分析を行うかについての話し合いを進めていた。

④分析した結果のグループ発表（担当した1班、3班についてのみ記述）

中間発表だったため、すべての班でまとめが完成しておらず、本を読み切っていないため分析が未了の班もあった。全体として、追求しがいのあるものであり、見応えがあった。また、テーマに関連づけて分析していくことへの慣れ、力の向上が見られた。しかし、まとめへどう進めばよいかの質問が複数の班から出ていた。

第一班「文学が先だった新家族像」は、擬似家族について分析していた。各作品の擬似家族例を図示するなど、家族の全体像を一見してわかるようにしていた。しかし、発表自体は、「文学の先見性」について語られる前に終わっていた。まとめ方と他作品を読むべきかという疑問を持っていたが、大学生より、「他作品には広げず、擬似家族に対する周りの人間の受け止め方について読み取るとよい」というアドバイスを受けた。『キッチン』では、擬似家族の関係に対して周囲から否定的な目で見られている描写がある。『オー！ファーザー』や『ウィンター・ホリディ』などの比較的近年の作品では、否定的な受け取り方はされていない。

第三班は「有川浩 社会現象ー有川浩作品が多くの人から愛されている訳とは…！？ー」という題で発表が行われた。「恋愛」「自衛隊」「スペシャリスト」で作品を分類し、読み取った関連性が「非日常の中の日常」「唯一無二で愛されるキャラクター」などの言葉で上手くまとめられていた。この班については、読み込みと関連づけが順調で、「有川作品が好まれる理由」の解を導き出し、その根拠となる記述とともに示すことができていた。

⑤生徒が対象とした作品のあらすじ

〔擬似家族探求グループ〕

○『キッチン』吉本ばなな

唯一の肉親の祖母を亡くし孤独の身となった桜井みかげ。ある時、同じ大学の学生で、生前の祖母の知り合いの田辺雄一に声をかけられ、雄一宅に居候することとなる。雄一と、オカマバーを経営する雄一の母えり子（実は男で、父の雄司）と3人で生活をするうちに、みかげは祖母の死を受け入れ、穏やかな気持ちになってゆく。

○『満月ーキッチン2』吉本ばなな

田辺家で半年ほど生活したみかげは、大学をやめ、田辺家からも独立して料理研究家のアシスタントとして働き始めた。そんなみかげのもとに、雄一からえり子が店の客に殺されたと連絡が入る。みかげは雄一と暮らすようになるが、曖昧な関係の2人の同居は周囲から理解されない。旅行に出た雄一がもう戻らないのではと感じたみかげは、出張先の伊豆から雄一の旅行先まで、深夜にタクシーを走らせてできたてのカツ丼を届けた。

○『ステップ』重松清

娘の美紀が1歳半の時、妻の朋子が突如病気で亡くなった。そこから始まった父子家庭での生活が父健一の視点で描かれる。娘の美紀が保育園児だった2歳から小学校卒業までのエピソードが9つの短編をなす。美紀には母の存在が必要ではないかと悩んだり、美紀に母の思い出を聞かせようとしたりと、健一も父として成長していく。最後には、健一の会社同僚ナナさんとの再婚も描かれる。義理の父母の関わりや、不妊治療を諦めた美紀の

伯父と伯母の姿など、世間一般の型通りではない家族の在り方、周囲からの関わりなども織り込まれている。

〔「有川浩」探求グループ〕

○『クジラの彼』有川浩

自衛隊員の6つの恋愛を描いた短編小説集。『海の底』のスピンオフ作品の表題作と『有能な彼女』、『空の中』のスピンオフ作品の『ファイターパイロットの君』、航空自衛隊員と航空機メーカーの女性の恋愛を描いた『ロールアウト』、彼女に会うため隊舎からの脱走をはかった若者に、上官が自身の体験を語る『脱柵エレジー』、恋愛がうまくいかない女性と彼女を想い続けた同期の男性自衛官を描いた『国防レンアイ』が収録されている。

○『レインツリーの国』有川浩

関西から上京した社会人3年目の向坂伸行は、「レインツリーの国」というブログの管理人ひとみと出会う。伸行の「直接会いたい」という願いを拒むひとみには、感音性難聴で補聴器を付けているという秘密があった。伸行の熱心さに折れたひとみはそれを隠して初デートをする。当日、ハプニングでイライラした伸行は、ひとみに怒りをぶつけてしまい、彼女の秘密を知ることとなる。その後、悩みながらも、理解し合うようになっていく。

○『阪急電車』有川浩

阪急電車今津線を舞台にした小説。「宝塚駅」から「西宮北口駅」間の8駅での出来事を描く。会社員と図書館で見かけた女性との恋、婚約者を会社の同期に取られたOLの復讐と再生、暴力的な彼氏との別れを決意した女、バカな社会人彼氏と女子高生、地方出身の大学生同士の恋など、電車内で展開する恋模様が描かれる。

(2) 細矢衡（全参加）

①生徒が対象とした作品のあらすじ

〔「有川浩」探求グループ〕

○『図書館戦争シリーズ』有川浩

1988年に制定された「メディア良化法」は人権を侵害し得る表現を規制する目的で制定された。これに伴い多くのメディアが良化特務機関の検閲の対象となり表現の自由が弾圧される事態となる。図書館はこのような事態に対応するべく図書隊を組織し防衛力を高めていった。2019年、図書隊に入隊した笠原郁は高校生時代に自分を救ってくれた図書隊員に強い憧れを持っていた。本を守ることに全てをかける郁の態度は、様々な衝突を生むが、上官や仲間の助けを借り徐々に成長していく。そんな中、指導教官である堂上篤が、郁を助けた図書隊員であることが発覚する。二人の恋の行方と共に、図書隊の奮闘する姿が描かれたシリーズ。

○『空飛ぶ広報室』有川浩

ブルーインパルスのパイロットになる夢を事故によって失った空井大祐は、防衛省広報室に異動となる。広報官として働く中で、ニュースのディレクターである稲葉リカと出会い、広報とは何か、自衛隊とは何たるか、考えをさらに深めることになっていく。

○『ラブコメ今昔』

本作品集収録の6つの作品はどれも自衛隊員の恋を描く。国防という大きな任務を背負った性別・役職の異なる自衛隊員達がどのような恋愛をするのか、様々な角度から描かれている。少し特殊な恋の形がここにある。

(3) 齊藤匡紀（部分参加）

各人に課題図書(3~4冊)を決めてもらい、その課題図書に共通のテーマを設定してもらった。「死」に関わることや障害の問題などの重いテーマから、恋愛や家族のことなど比較的身近なテーマまであった。

生徒は家族、父と子の関係などのテーマでは登場人物の性格を間違いのない範囲で分かりやすく表現してくれたため、その小説における基本構造、面白みをしっかり読み取れていたと感じた。ただ、人物の行動の意味、発

言の意図のように深く考え、読み取らなければならない部分については、生徒自身しっかり読み取れている性格などを考慮に入れ解釈していく必要がある。この点につなげられていたかどうかは怪しい。また、小説内の主要人物に関わる周囲の人達との交流にも目を向けなければ、テーマを根底から支える土台が構築できなくなってしまう。作品を大きく見て解釈していく能力も必要になることだろう。

幽霊(死者)が出てくるもの、障子に関わるものなどは、おおよそ実感として捉えることができない難解なテーマである。一つの小説として取り組むのなら断然ハードルは高いだろう。だが逆に主題の抽出という点においてはむしろ捉えやすいかもしれない。先の身近なテーマでは個々の作品の理解に執着できてしまうが、こちらのテーマにおいてはむしろ共通点、相違点の考察の方が進みやすいのではないだろうか。二つの作品を比べて取りまとめることは、生徒個人の考えの中でうまくまとまっていたと感じた。

(4) 山根有貴 (部分参加)

9月8日、15日は1人3冊選んだ作品を順にA、B、Cと位置づけ、AとB、AとCに共通するテーマであらすじと合わせて個人発表をした。そのうち、9月8日は『ラン』『シアター』『君にさよならを言わない』(テーマ: 大人たちの絆、死者との交流)と『悼む人』『三四郎』『MOMENT』『西の魔女が死んだ』(テーマ「偽善」「死」)を、9月17日は『吹部!』『あと少し、もう少し』『博士の愛した数式』(テーマ: 新しく来た顧問の先生と生徒の関係、教える人と教えられる人)と『鴨川ホルモー』『夜は短し歩けよ乙女』『2005年のロケットボーイズ』(テーマ「恋愛アプローチの仕方」「新しいことへの挑戦」)を担当した。生徒にとって、テーマが合致する3作品を集める作業は思いのほか難しく、読んで考察を加えていく中で思っていたテーマから乖離して、思い悩んでいる様子が見られたが、生徒独自の視点で物語を捉え意欲的に取り組んでいた。

(5) 小野田磨柚 (部分参加)

①はじめに

私が担当した発表は五つあり、9月8日に三つ、9月15日に二つあった。発表方法は、生徒自身が三冊本を選び、テーマを二つ立てて考察を行うものである。ここで言うテーマとは、三冊すべてに共通するテーマではなく、一冊目の本を考察の中心となる本(以下、中心書と記す)として取り扱い、一冊目と二冊目、かつ一冊目と三冊目で、それぞれに合うテーマを作っている。

②発表内容

9月8日の一つ目の発表は、①『ラン』②『シアター』③『君にさよならを言わない』の三冊で、①②「大人達の絆」、①③「死者との交流」をテーマに考察している。

ここでの発表は、①『ラン』を中心書として、②と③の共通点からテーマを立てている。①と②も高校生よりも上の年代の「大人」が登場する作品である。「大人達」が「絆」を持つとはどういうことなのか、という問いのなかに、一般に「大人達が絆を持つこと」の困難さを含め、考察による深まりが期待できた。その際には、「子ども」と「大人」の「絆」の比較が求められる。①と③の「死者との交流」というテーマは現代小説において、例えば『ツナグ』等で、よく見られるようになったものである。比較により膨らみそうなテーマである。

二つ目の発表では、①『ウィンター・ホリデー』②『とんび』③『ちょっと今から仕事やめてくる』の三冊で、①②「父と子の関係」、①③「現代の仕事の現状」をテーマに考察している。

この発表におけるテーマの①②「父と子の関係」は、家族関係として大きな枠として捉えることもできた。③の「現代の仕事の現状」については、テーマとして取り扱うには範囲が広く、もう少し限定して考えると良いと思われた。①と③の二冊から現代の仕事の現状が見えるかどうか、選書の適切さについても考えると良い。

三つ目の発表では①『或る「小倉日記」伝』②『仏果を得ず』③『レインツリーの国』の三冊で①②「精魂を

かけるもの」・「身体障害者と周囲の人」をテーマに考察している。

この発表では、自身が立てたテーマを深めて考えていけるような作品を選んでいった。中でも、①と②のテーマである「精魂をかけるもの」については、良い着目点であった。さらに、現実の社会構造とフィクション内の社会構造との対比まで考察が進められると、生徒自身にとっても十分な達成感が期待できるだろうと考えられた。

9月15日の一つ目の発表では、①『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話』②『ステップ』③『金メダル男』の三冊で、①②「家族の関係」、①③「不可能への挑戦、あきらめない心」をテーマに考察をしていた。

この発表では、中心小説として①『学年ビリのギャル (略)』を挙げているが、今後、考察が難しくなっていくのではないかというのが批評側の共通意見であった。①の学年ビリのギャルの成功譚をどのように物語化しているかに着目することでそれなりの突破口が得られると思われた。②と③を選書する際の着目点は挑戦的で面白いものである、今後の取り扱いが期待できた。

二つ目の発表は、①『鴨川ホルモー』、②『夜は短し歩けよ乙女』、③『2005年のロケットボーイズ』の三冊で、「恋愛アプローチの仕方」・「新しいことへの挑戦」をテーマに考察していた。

この発表では、ヒロインという小説的役割に着目し、恋愛におけるアプローチを見ていた。が、ヒロインの物語上の役割、主人公との関係性等、物語全体の構造についても注目できるとよいと考えた。また、①と②は舞台が「京都」で共通しており、こちらのテーマに注目しても考察を深めていけそうであった。加えて、登場人物が置かれている環境にも目が向けられるとさらに現代社会にも通ずる考察になっていくと思われた。

(6) 小柳早希(国語領域 4 回生・全参加・対象作品のあらすじのみ／植山俊宏加筆修正)

○『植物図鑑』有川浩

ある冬の日、自宅のマンションへ帰ってきたさやかは、マンションの前で行き倒れている男「イツキ」を拾い、思いがけず同居をすることになった。イツキは植物に詳しく、週末にはさやかを連れて植物の「狩り」に出かけるようになる。二人は恋人の関係になるが、ある日イツキは突然姿を消してしまう。彼が残した「狩の習慣」を頼りに、さやかは一人で「週末の狩り」を続ける。一年ほど経ち、イツキはまた姿を現し、二人は婚約を果たす。

○『キケン』有川浩

成南電気工科大学にある機械制御研究部、略して【機研】の新年度は、二回生である上野直也と大神宏明を中心に、9人の新たな新入部員を加えて活動を行うこととなった。彼らは機械のスペシャリスト、ラーメンのスペシャリスト、友情のスペシャリストとしてロボットバトルや学祭などのイベントでめざましい活躍を見せる。

○『三匹のおっさん』有川浩

還暦を迎えて会社も定年退職した清田清一(キヨ)は、かつての「三匹の悪ガキ」の立花重雄(シゲ)と有村則夫(ノリ)とともに、近所の悪を懲らしめる自警団「三匹のおっさん」を立ち上げる。彼らは緊密に連携・協力して、「剣道の達人」「柔道の達人」「機械の達人」の活躍を見せる。

(7) 木村美貴(国語領域 4 回生・全参加・対象作品のあらすじのみ／植山俊宏加筆修正)

○『ステップファザー・ステップ』宮部みゆき

プロの泥棒「俺」は、双子の中学生、宗野直と哲に出会う。双子の両親はそれぞれに恋人と駆け落ちしており、双子に頼まれて「俺」は疑似親父(ステップファザー)になることに。初めは双子に弱みを握られ、「共犯者」として接していた「俺」だが、段々と「お父さん」としての意識が芽生え、父親として成長していく。

○『オー！ファザー』伊坂幸太郎

高校生の由紀夫には、母親が一人、父親が四人いる。ギャンブル好き、女好き、博学、スポーツ万能とばらば

らな四人だが、それぞれの愛し方で息子に接し、息子の危機には力を合わせ一丸となって立ち向かう。血のつながりだけが家族ではない。由紀夫は四人それぞれの影響を受け、父親達との信頼関係の中で成長していく。

○『ウィンター・ホリデー』坂木司

元ヤンキー、元ホストの大和が出会ったのは、昔の恋人が自分に伝えずに産んだ、自分の子どもだった。しっぺ返りに育った小学五年生の進と、互いに不器用ながらも心を通わせた夏は終わり、進がやってくる冬休みを楽しみに懸命に宅配便ドライバーとして働く大和。血のつながりがあるだけでは「家族」になれない。失敗や喧嘩しながら、大和は父親として、進は子どもとして、成長していく冬から春にかけての物語。

V. 結語

1. スーパーグローバルハイスクールにおける近現代文学探求の意味—新しい文学の読み方—（植山俊宏）

文学作品の比較読み・分析読みを通して、近現代を見るというコンセプトは成功したと考えられる。これまで作品の内容に固執し、行間を読むことに傾斜していた読み方は払拭され、グローバル的に通用する問題解決を志向する読み方に切り替えられていた。ただ、この「新しさ」には慣れが必要のため、ある程度の反復が求められる。

2. 高大連携事業としての大学院生・研究生・学部生の支援・指導のあり方とその効果（植山俊宏）

参加者（全参加・部分参加）8名の考察・所感等から支援・指導に工夫が必要だったこと、支援・指導の働きかけの効果を常に意識したこと、また反省的に改善を加えていったことが見受けられた。大学が大学院生・研究生・学部生を派遣して、高大の連携を図ったことの成果は得られたと考えられる。

また参加者が、対象作品をすべて読破して（グループ別の分担も含めて）、支援・指導に臨んだことは、生徒の信頼を得たこと、的確な支援・指導が行えたことなどの点で大きな成果を挙げたといえる。

3. 大学院生・研究生・学部生の支援・指導活動に関する総括（細矢衡）

アカデミック・ラボは個人の活動からグループ活動へと段階的に活動が変化していく。個人が興味を持っているテーマについて探求する時間、他の生徒と作品とテーマを持ち寄り、新たな分析を行う時間、そして発表へと生徒が協働して探求を進める構図となっている。小説の内容に深く言及する分析ではなく、小説の描いているテーマを深く分析し近・現代社会の在り方について考えるという発展的な試みである。

4. 指導・支援の成果に関する総括（細矢衡）

国語科の授業の中や、日常の読書活動においては一つの作品を精読することが活動の主体となっていることが多いが、このアカデミック・ラボにおいては複数の作品を読んで比較するという新しい読書体験を生徒が経験できていると感じている。作品全体のテーマを捉え、別の作品との共通項を探す体験は、多くの気づきを生徒に与えていた。小説を普段とは違った角度から分析する経験は生徒の視野を広くしたのではなかろうか。

〔注記〕 高校生・大学院生・学部生・研究生がテキストとした作品は、未文庫化の一部を除いて、すべて文庫本を使用した。なお、末尾ながら実践の機会をいただいた嵯峨野高校の石田浩一教諭に深謝申し上げる。